SCK® NEWS

創刊 Vol.20 記念

Livedo Medical
株式会社リブドゥコーポレーション

≪メディカル営業本部≫
〒164-0011 東京都中野区中央1-38-1
住友中野坂上ビル16F
TEL.03-5338-5155(代)
http://www.livedo.jp

発行日：2019年(平成31年)3月15日
発　行：メディカル営業本部

整理収納アドバイザー直伝
災害時の対応に差がつく 5S活動

医療材料やME機器が数多く保管されている手術室。いかなる状況でも、破損リスクを低減し、誰もが簡単かつ効率的に必要な物が取り出せる環境を構築したい。そこで、「災害時の対応に差がつく5S活動」をテーマに、特定非営利活動法人ハウスピーキング協会認定 整理収納アドバイザー1級の資格保有者である福井泰志氏が保管ルールの決め方や5Sを継続していく上で大切なポイントを解説。

災害時などにおける多数傷病者発生時に、特定の外傷や多くの重傷者数を受け入れる能力は「Surge Capacity」と称され、この能力は救急部門の対応能力よりも手術部門の対応能力が重要であるとの報告があります。そのため、手術室における5S活動は、平時はもちろん災害時にも効果的で重要であると考えられています。今回は、5Sのうち「整理-seiri-」「整頓-seiton-」「習慣化-shukanka」の3つに絞ってポイントの解説をしますので、日ごろの5S活動をパワーアップしていただければ幸いです。

まずは、徹底できなければ5Sの成功は無いと言われる「整理-seiri-」についてです。不要品や過剰な在庫の買い置きがないか、不要品には表示をつけ削減の取り組みをしているかが基本です。しかし、必要なものと不要なものを分けるためには基準やルールが必ず必要となります。特に保管場所を圧迫するのがME機器ですが、元々高額なため災害時のバックアップを兼ねて長期未使用品や旧型品であっても保管しがちです。そこで、赤札を活用し半年か一年単位で、①手術室エリア、②手術室外周廊下、③手術室と同じ階の倉庫、④病院内のいずれかの倉庫、⑤グループ施設での一時保管、⑥代理店一時保管、の順に保管エリアを変更して最終的に破棄の判断を下してはいかがでしょうか。災害時に使い慣れない機器を使用するよりも既存の機器の転倒や破損防止に目を向けてください。

次の「整頓-seiton-」では、「置き場所」「置き方」「表示」の整頓3要素を明確にして徹底してください。必要な物品を使いやすいようきちんと置き、誰でも分かるように明示することは、平時において段取り時間の短縮など業務を早く楽にする取り組みとなります。災害時は、たとえ診療材料が地震で散らばったとしても、保管場所に速やかに戻せるため、早期の手術室機能の復旧が期待できます。もちろん器材棚の転倒防止策と併せて実施してみてください。

最後は「習慣化-shukanka」です。やってはいけないことをやっていないか、ルールや規則を守っているか、自己規律を育成している取組みがみられるかが基本です。昔は「躾-shitsuke-」と言われていましたが、ここでの大切な点はルールや規則を習慣付けることのため、近年では「習慣化-shukanka-」と呼ばれることも多くなりました。行為の目的や意義を実行するスタッフが理解・納得すると、平常時ではインシデントが防げ、災害時では対応力の強化につながるといわれています。手術室では定期的に災害シミュレーションの訓練をされていると思いますが、実際の災害はシナリオ通りにはいかないものです。日頃の「習慣化-shukanka-」で培った基本が判断力を鈍らせることなく、迅速な対応に繋がります。5Sの中では成果が目に見えにくい活動となりますが、軽視することなく活動いただければと思います。

最後に、現在の手術室における5S活動は第三ステージに突入しつつあります。第一は人手不足対応とインシデント防止、第二は災害対策、これから始まる第三ステージは働き方改革です。多様化や効率化がより一層求められ、5S活動の内容も見直されています。災害対策が落ち着いたら、次のステージへステップアップしてみてください。

（福井）

福井 泰志氏

【プロフィール】
㈱リブドゥコーポレーションメディカル事業部にて、10年に渡り100病院以上の手術室調査を手掛ける。調査の過程で器材庫の煩雑さに気づき、独学で5Sを勉強。2011年3月の東日本大震災をきっかけに、社内外で災害ボランティア・チャリティー活動を開始。

第29回全国老人保健施設大会 in埼玉
おむつのチェンジで動き変わる！

2018年10月17日（水）～19日（金）の3日間、第29回全国老人保健施設大会（会場：ソニックシティ・パレスホテル大宮 他）が開催された。本大会では、「彩ろう！豊かな高齢社会を～老健は地域づくりの担い手です～」をテーマに、全国の医師・看護師・介護福祉士・事務員等が、施設や地域での取り組み事例を発表し、意見交換の場として様々な議論が交わされた。

㈱リブドゥコーポレーション（以下リブドゥと記載）は、大人用紙おむつブランド「リフレ」を展開しており、2016年より新ブランド「リフレ スマートライン」を立ち上げた。ADL（日常生活動作）の維持・向上に配慮した超うす型おむつで、モレ防止性能だけでなく、装着時の快適性、リハビリテーションを目的とした高いフィット性を特長としている。本大会では、「スマートライン」を使用している介護老人保健施設の方々も演者として多数参加しており、「おむつのチェンジで動き変わる くらし変わる!!～おむつを変えたことでQOL向上に繋がった事例紹介～」を初め、排泄自立等の成功事例と取り組み手法や改善後の経過について紹介いただいた。介護の領域において、排泄ケアは特に重要な役割を占めており、介護者の適切な用具選定が、使用者の衛生面・心理的なケアに繋がると思われる。本大会においても排泄分野の講演が多数あり、発表を真剣に聞き入る姿が多く見られた。

▼展示ブースレポート

同日に開催された併設企業展にて、リブドゥは「リフレ スマートライン」全6アイテム（パンツタイプ・テープタイプ各2サイズ、パッドタイプ2種類）の商品展示を行い、初日から多くの来場者に立ち寄っていただいた。ブースでは、商品の装着がその場で体験でき、魅力である「動きやすさ」「はきごこち」を実感。「おむつなのにゴワゴワしない」「足まわりが動きやすい」など、好評なコメントをいただいた。

（田路）

「編集後記」

30年続いた「平成」という時代がまもなく終わります。

元号改元に際し、時代を振り返る特別番組や記念書籍、平成最後と銘打つ数々のイベントなど、各方面でにわかに活気づいています。新しい時代の幕開けに期待を膨らませる一方で、平成の世相は「バブル崩壊」「失われた20年」「テロ」「自然災害」など暗い時代イメージで報道されることが多いように感じます。

昨年末、天皇陛下は誕生日に先立つ記者会見で「多くの犠牲と国民の弛みない努力によって、平成が戦争のない時代として終わろうとしていることに、心から安堵しています」と胸中を述べられました。

いつの世も、平穏に安心して暮らせる事は庶民の願いです。

編集長　陶守久美子

LivedoTopics

- 2019年7月20日(土)、第21回日本医療マネジメント学会学術総会（会場：名古屋国際会議場）にて、弊社はランチョンセミナー「新時代を担う医療職の働き方 ～手術室看護師が本来業務に集中できる環境とは～」を共催いたします。
- 2018年11月、TBSテレビ（関東広域圏放送局）と毎日放送（近畿広域圏放送局）にて、女性用尿ケア専用ブランド、「リフレ　超うす安心パッド」のテレビCMを放映しました。咳やくしゃみをした時、すぐにトイレに行けない時など、シーンごとに最適な商品をご紹介しています。詳細は弊社ブランドサイトにて公開中。（URL：https://www.livedo.jp/anshinpad/）

第32回日本手術看護学会年次大会 in横浜
周術期を通して患者を支援する

2018年11月23日（土）・24日（日）の2日間にわたり、第32回日本手術看護学会年次大会（会場：パシフィコ横浜 会議センター）が開催され、約4，300名が参加した。横浜での開催は、6年ぶりとなる。本年度のテーマは「手術看護から周術期看護―変遷する社会に対応できる手術室看護師の育成―」。手術におけるチーム医療の要である手術室看護師が、他部署との連携を通じて患者さんの気持ちに寄り添い支援を展開する必要性について、充実した講演や発表が行われた。開会式は、東海大学吹奏楽研究会による演奏で華やかに幕開けした。大会ポスターに彩られた10色のラインは、企画運営に携わった関東甲信越地区一都九県を表現しているそうだ。横田富美子大会長（関東甲信越地区会長／埼玉県済生会川口総合病院）は、チームで力をひとつにすることの大切さや、本大会で周術期の様々な知見・知識を得て患者に還元してほしいと開催への意向を示した。石橋まゆみ理事長（日本手術看護学会理事長）は、看護の質の向上、看護師の業務領域の拡大を目標に本大会で交流を図ってほしい、人生の一大決心である手術に携わるうえで患者とその家族に寄り添うという根本的な理念を忘れないでほしいと述べられた。

大会長講演「当院の医療材料の不具合発生時における管理体制」では、横田大会長より不具合が発生した際の診療材料委員会における管理の流れについて説明がなされた。かつては診療材料の不具合が発生した場合は、現場からメーカーに回答を求めており、メーカーからは口頭での回答のみでデータベースが残らず、回答期間が長くかかることが少なくなかった。そこでISO9001に基づいた独自の不良品発生報告書を作成するとともに、対応するフローを、①現場（不良品発生報告書を委員会に提出）→②診療材料委員会（メーカーへ不良現品と情報を渡す）→③メーカー（使用方法確認、原因調査、是正対策）→④診療材料委員会（メーカー回答確認、使用方法の再確認、対応検討）という内容に体系化した。手術室だけでなく院内全体で医療材料を共通して使用すること、メーカーに意見を伝えることが医療材料の品質向上に繋がると締めくくられた。今年は大阪北部地震、西日本豪雨など、自然災害を身近に感じる機会が多かったためか、災害対策に関する演題が目立った。第32回日本手術看護学会は講演、企業展示ブースともに盛況のうちに閉幕した。

次回、第33回日本手術看護学会は2019年10月11日（金）・12日（土）に岡山コンベンションセンターにて「役割とやりがい―地域へ繋げる周術期看護―」をテーマに開催される。（山口）

認定看護師
インタビューリレー〈第13回〉

熊本地震からの再建
～地域を守る市民病院であるために～

――熊本地震発生から約3年が経ちますが、地震発生直後の様子をお聞かせください。

2016年4月14日21時26分に震度7の地震（前震）が発生しました。その頃は帰宅していて、家族の無事を確認してからすぐに病院へ駆け付けました。電気等のライフラインはまだ通っていて、入院している患者さんの状態を確認してから搬送された患者さんの処置・対応をしました。二日後、4月16日 深夜1時25分に震度7の地震（本震）が発生し、この時点で完全にライフラインが停止しました。ちょうどその頃は緊急対応で手術室に待機していましたが、建物自体が地震のダメージにより患者さんを受入れることが不可能になりました。入院中の患者さんは転院、もしくは退院していただくことになり、病院は8階建ですがエレベーターが使えないため、各階から1階までの搬送は、職員が力を合わせて慎重に行いました。また、搬送器具にも数に限りがあるため、その場の判断で毛布等を工夫し、活用していたと思います。気づけば外は明るくなっていて、患者さん全員の転院および退院が完了したのは、同日の15時頃でした。その後は、手術室が使用不可能であるため、仮設テントにて市職員として避難所の管理と他施設での看護業務を行っていました。

――地震中、スタッフとの連絡はどのように取りましたか。

PHSを支給されていましたが、通信障害でほとんど繋がりませんでした。また、関係者には携帯電話アプリのLINEを用いて連絡を取りました。瞬時に連絡が取れなくてもメッセージが残せるため、とても便利に感じました。

――災害時のマニュアルは役に立ちましたか。

今回の地震は、前震と本震がどちらも夜間に発生したため、手術室に患者さんがいない時の行動マニュアルは必要だと感じました。

患者さんの搬送方法についても、マニュアルではストレッチャーに乗せて手術室から搬出するパターンしか備えていなかったため、搬送器具が使えない状況下での対応はとても困難でした。

――その後、災害マニュアルに追加された取り組みはありますか。

災害対策委員会を立ち上げ、複数パターンを想定したマニュアルの作成に着手しています。例えば、手術中以外の災害発生時は、手術室職員がどの部門へ支援に行くかを検討しています。また、勉強会では、防火扉、排煙口等の仕組みや使い方等を学び、スムーズに使いこなせるように知識を深めています。

――まもなく熊本市民病院が再稼働しますが、新病院の魅力について教えてください。

新病院は、熊本地震の教訓を踏まえて、ヘリポートや非常用発電機を2基設置した災害に強い構造です。従来通り、胎児から高齢者まで幅広い患者さんに医療を提供する病院でありたいと思います。

――最後に、まだ災害を受けていない病院に向けてメッセージをお願いします。

地震が発生すると避けることが出来ないため、被害を最小限にすることが重要です。実際に防災訓練を行った際には、非常用電話は非常用ベルを押さないと使用出来ないなど想定外の事態を把握することが出来ました。そのため、災害マニュアルの定期的な見直しや共有を行い、あらゆる状況下にも対応出来るよう、細部までシミュレーションをしていただきたいと思います。（聞き手：畑山・山口）

山上 進之介氏

【プロフィール】
熊本市民病院 手術室主任
（手術看護認定看護師7期生）

特集 2018年度 日本手術看護学会 各地での取り組みを紹介

東北地区学会

スイーツセミナー 元客室乗務員がお伝えするコミュニケーション&マナー講座

2018年6月9日（土）、第39回日本手術看護学会東北地区学会（会場：仙台市中小企業活性化センター　多目的ホール）にて、㈱リブドゥコーポレーション（以下リブドゥと記載）はスイーツセミナー「元客室乗務員がお伝えするコミュニケーション&マナー講座～患者さんの心理を理解し、心のこもった看護を届けよう～」を共催した。講師は元客室乗務員で、介護職経験後、接遇・マナー教育を手掛けている第一印象研究所 代表 杉浦永子氏。

本セミナーの企画背景は、看護部内でも特に患者さんとの会話時間や内容が限定している手術室だからこそ、対応力（コミュニケーション力）の差が患者満足度や業務効率に影響すると課題認識している看護師さんが多いこと。学会プログラムでは、手術看護に関する技術的な演題が主であることから、敢えて「対応力」という新しい視点で異業種から学べるセミナーがあれば、看護師さん達の気づきが得られるきっかけになるのでは、との思いが学会大会長とも共鳴し開催につながった。

セミナーは、元客室乗務員ならではの機内風アナウンスにて開演し、患者さんの心理や接遇・マナーについての解説があった。また、人の印象は第一印象の影響が大半を占めるため、表情や態度（お辞儀、ご案内の仕方）には意識することが重要であると伝えた。そして、人のタイプには大きく分類して「主導型」「行動型」「安定型」「慎重型」があるため、相手のタイプを理解したうえでコミュニケーションを図ることが良好な関係構築につながることも述べた。最後に、セミナーの復習として、術前・術後訪問での患者さんへの声の掛け方について講師が例を示し、参加者も後に続いた。参加者からは「看護や手術チームにコミュニケーションは必要。でもあまり学ぶ機会が無いため良かった」「普段なかなか出来ていないことを改めて考えさせられました」「忙しいと患者さんには笑顔を向けられるが、スタッフには気が回らないこともあるため、忘れない様に心がけたいと思った」「接遇の教育担当をしていますが、オペ室のみの授業でまだ研修してないこともあったため、参考になりました」等のコメントがあり、看護師さん一人一人が日々の業務と向き合い、今後のありたい姿について考える場となった。（畑山）

東海地区学会

演題彩る60th記念セミナー&恒例 お役立ちセミナー

2018年11月3日（土）、第60回日本手術看護学会東海地区大会（会場：愛知県産業労働センターウィンクあいち）が開催された。本会は、1982年に第1回が開催され、今回で60回目を迎える。リブドゥは、5年以上継続している職場づくり視点でのお役立ちセミナー（本年度は「5Sセミナー」と「メイクアップセミナー」）に加え、本会の周年を祝して、60th記念セミナーと題した日常生活にも役立つ「パーソナルカラー講座」を共催した。

●60th記念セミナー パーソナルカラー講座

色彩を日常生活に取り入れて、職場とプライベートとの気持ちの切り替え方法を提案する「パーソナルカラー講座～自分に似合う色を知り、印象を変えてみませんか?～」を共催。㈱プラスカラーズ 代表取締役 岩田亜紀子氏より個人がそれぞれに持つ色（目や肌の色味等）に対して、相性の良い色彩群をアドバイスしてもらえる講座で、参加者からは「配色で印象を変えられることを実感した」「自分のコーディネートを見直す良い機会になった」「自分に似合う新しい色を知ることが出来た」等の感想があり、講演内容の目新しさに興味を抱かれていた。

●5Sセミナー

近年、各地で多発している予期せぬ自然災害を視野に入れた「5Sセミナー～東北地方での事例を踏まえた5S活動 実践ガイド～」を共催。本セミナーでは、東日本大震災の復興事例を共有し、被害の縮小に実績のある整理整頓術を紹介した。参加者からは、「所属病院に対して環境面での課題や問題点が多く、改善意識が高まった」等の感想があった。5Sは整理・整頓・清潔・清掃・習慣から成るが、「習慣」部分を特に強化し、継続した取組みとすることの重要性が伝えられた。

●恒例 メイクアップセミナー

患者さんへの安心感をテーマに「メイクアップセミナー～眉と目元 医療現場にふさわしいメイクの実践～」を資生堂ジャパン㈱と共催。本セミナーでは、手術室看護師の身だしなみのうち、特に患者さんへの印象に影響のある眉や目元を実際にメイクをしながら印象の変化を体感した。参加者からは「接遇の基礎を学ぶことが出来た」「普段はあまりメイクに意識していなかったため、今後の参考にしたい」「マスクを付けた素っぴん顔が怖い印象を与えると分かった」等の感想があった。（田村）

九州地区学会

ランチョンセミナー 対応力向上セミナー ～心手を受ける患者さんの心理を理解し、満足度を高めよう～

2018年9月29日（土）、第36回日本手術看護学会九州地区大会（会場：沖縄コンベンションセンター）にて、リブドゥはランチョンセミナー「対応力向上セミナー～手術を受ける患者さんの心理を理解し、満足度を高めよう～」を企画。本大会は台風により中止となったが、セミナーで予定していた、オフィスキャリーエール 代表 小那覇りな氏の講演内容は、本機関誌「SCK NEWS Vol.19」に掲載中。（畑山）

手術看護分野 認定看護師会 主催 神奈川手術看護セミナー

ランチョンセミナー 災害に備えた5S活動 ～東北地方での事例をふまえて～

2018年10月20日（土）、第10回神奈川手術看護セミナー（会場：横浜市立大学金沢八景キャンパス 主催：神奈川手術看護認定看護師会）にて、リブドゥはランチョンセミナー「災害に備えた5S活動～東北地方での事例をふまえて～」を開催した。講師は、整理収納アドバイザー（1級）であり、東日本大震災のボランティアチャリティー活動の経験を踏まえて、実践的な5Sを提案している福井泰志氏（リブドゥ社員）。同氏は、10年に渡り100病院以上の手術室運営に関する調査を行い、数多くの課題を解決してきた。講演では、5Sの基礎や東北地方での事例について触れ、災害対策につながる5Sのポイントを紹介した。セミナー終了後には、参加者からの個別相談が相次ぎ、「明日から直ぐに実践したい」等のコメントがある一方で、「うちの病院では絶対無理だと思った」等と、理想とのギャップに悩む看護師さんもいた。参加者アンケートでは、69%の看護師さんが手術室の5Sを強化したいと回答しており、施設ごとでの職場環境に差はあるにせよ、多くの看護師さんがさらなる改善を必要としている事が分かった。（畑山）

このあたりアンケート

第8回「手術室へ配属になったきっかけ」

専門誌にも載っていない、普段疑問に思っていても今さら聞けない…そんな「このあたり、手術室ではどうなってるの?」という疑問にお答えする独自のアンケート企画。

今回は「手術室へ配属になったきっかけ」について、日本手術看護学会地区学会に来場された手術室看護師の中から、約570名の方に回答をいただいた。

「組織の人員配置でたまたま」と回答された方が65%を占め、次いで「学生時代から興味があった」と回答された方が25%、「他部署経験後に興味が湧いた」と回答された方が10%という結果だった。また、看護師のキャリアとして「今後どちらを目ざしたいですか?」という問いでは、「1つの部署を極めるスペシャリスト」と回答した方が56%であり、内訳を見ると北海道と四国地区に所属する看護師さんの割合が高かった。逆に、「様々な部署を経験するジェネラリスト」と回答された方は44%で、内訳を見ると北陸と中国地区に所属する看護師さんの割合が高かった。

公益社団法人日本看護協会が認定する専門看護師、あるいは、認定看護師の制度がある。専門看護師は、特定分野における深い知識と看護技術を有し、複雑で解決困難な看護問題を持つ個人・家族および集団に対して、組織横断的なマネジメントや研究活動など施設内外で活動を行う。認定看護師は、ある特定分野において、熟練した看護技術と知識を用いて、水準の高い看護を実践する看護師のことをいう。実践・指導・相談の3つの役割を担い、地域においても、広く教育指導や相談にのっている。専門看護師を「看護ケアのスペシャリスト（専門家）」とするならば、認定看護師は「臨床現場のエキスパート（熟練者）」と表現されることもある。（浦）

図1：手術室配属になったきっかけ (n=578)

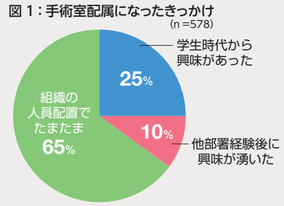
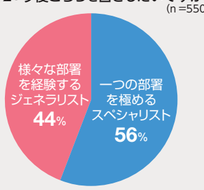
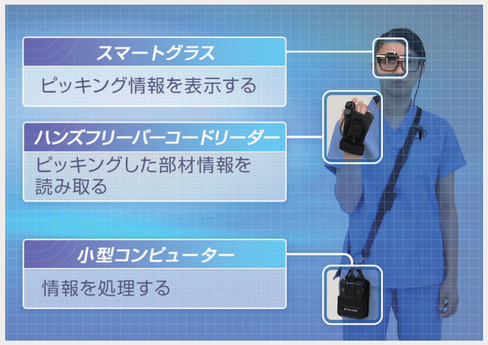


図2：今後どちらを目ざしたいですか? (n=550)



第32回日本手術看護学会年次大会 新ソリューションツール NAVI-SCOPE™を出典

2018年11月23日（金）・24日（土）、第32回日本手術看護学会年次大会（会場：パシフィコ横浜 会議センター）併設企業展示会場にて、リブドゥは新ソリューションツール「NAVI-SCOPE™（ナビスコープ）」を出展した。NAVI-SCOPE™はピッキング業務の支援ツールで、「スマートグラス」「ハンズフリーバーコードリーダー」「小型コンピューター」の3点を装着すれば、写真付きピッキングリストの表示や正誤判定、記録を行うことが出来る。手術室経験の少ない看護師さんや、医材知識の無いスタッフでも、正確かつスピーディーに業務が行えるようにと開発された。



展示ブースでは、NAVI-SCOPE™の体験イベントを開催。スマートグラスに表示された物品のピッキングや、バーコードリーダーによる照合の記録をその場で経験することが出来る。ピッキング対象物には、人の判断だけでは判別がつき難い、医材に見立てたオブジェを複数配置。このようなケースでもシステムを活用すれば、目視に頼ったヒューマンエラーを未然に防ぐことが可能になる。ピッキングが正しく終了すると、並べたオブジェからキーワードが出来上がる遊び心もあり、大いに盛り上がった。中でも、特に人手不足に悩みを抱える管理職の方が強い興味を抱かれており、リブドゥの新製品発表は好評のうち閉幕した。（畑山）